〈2005年 殿堂入り〉

自動車部品産業の黎明期に多大な貢献

曙ブレーキ工業株式会社　元代表取締役社長・会長
日本自動車部品工業会　元会長
信元　安貞

信元　安貞（のぶもと　やすさだ）　略歴

1920（大正９）年　8月19日生まれ
1943（昭和18）年　上海東亞同文書院大学卒業
（1944年より軍隊生活1年間）
1950（昭和25）年　曙産業株式会社入社
業務部次長・業務部長歴任
1951（昭和26）年　取締役に就任
1954（昭和29）年　常務取締役に就任
1960（昭和35）年　曙ブレーキ工業株式会社に社名変更
1964（昭和39）年　代表取締役社長に就任
1990（平成２）年　同社会長に就任
1994（平成６）年　名誉会長に就任
2000（平成12）年　名誉顧問に就任
2003（平成15）年　５月８日　82歳　永眠

座右の銘
「人間は知と情を二つながらにして合せ持った動物である」
1984年～1990年　日本自動車部品工業会会長

賞典
1981年　藍綬褒章受賞
1991年　勲二等瑞宝章受賞
1999年　文化庁長官賞受賞
2003年　従四位受賞

入社

1950年、戦争直後の危機を乗り切ってようやく企業基盤が確立されるころの曙産業（後の曙ブレーキ工業（株））に入社、最初は資材課長として採用された。

経営に参画

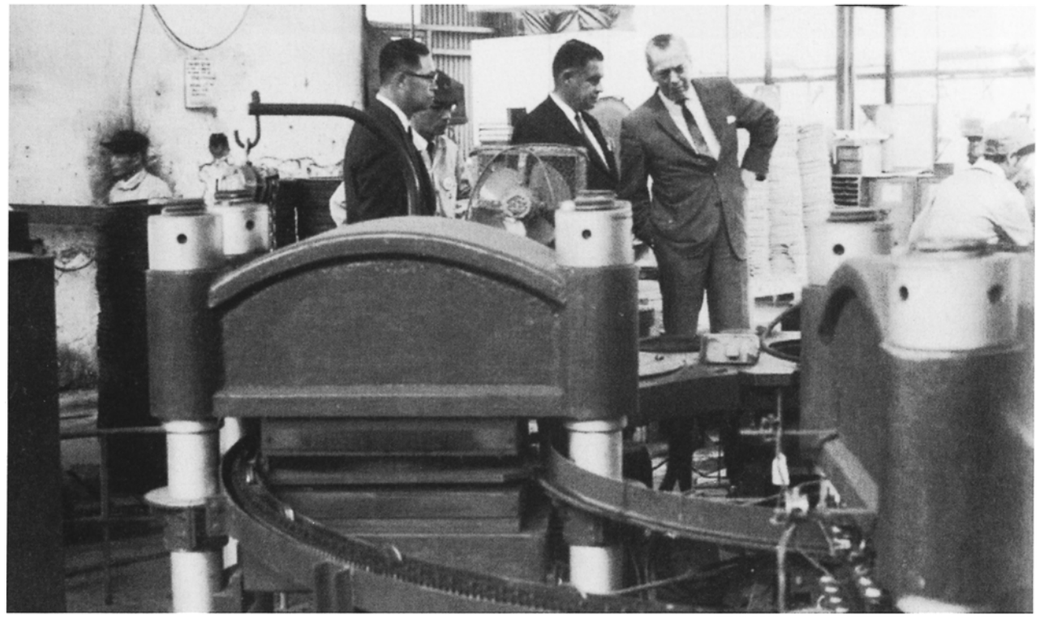
翌年には取締役に就任、経営に参画した。ブレーキ部品メーカーの将来にとって何が一番重要な問題であるかを考えた結果、会社が自主独立型の部品メーカーとして存続していくためには、単なるブレーキライニング単体での事業ではなく、アッセンブリーメーカーへと領域を広げ、総合ブレーキシステムメーカーを目指すという結論に至った。そして、研究・試作化をする中で「曙ブレーキで日本初のブレーキシューが開発されている」という噂がかなりのスピードで自動車業界に広まり、国産化を目指していた自動車メーカーから積極的な反応があったのである。

1956年に日本生産性本部主催のアメリカ自動車部品工業視察団に参加し、自動車先進国の生産現場に日本の現状とのあまりにかけ離れた実態を見てショックを受けた。世界的大手ブレーキメーカーである米国ベンディックス社のアッセンブリー生産現場の実態を見学して「曙がこのような生産現場を持つことが、私の夢の具体的な姿なのだ」と実感したのである。

1957年に代表取締役専務に就任。経営の全責任を負うことになり、常に能率の向上による生産増強を主眼にして時代のニーズに応えるべきであると考えていた。そして同年4月に本格的なシューの生産がスタートし、総合ブレーキシステムメーカーとしての第一歩が踏み出され今日への道が開かれたのである。

部品工業の実態調査

当時、国会では自動車産業育成策の柱として「機械工業等振興臨時措置法」（機振法）が5年の時限立法として可決されていた。その運用に向けて、航空機部門から独立したばかりの通産省自動車部が中心となり、官民一体の部品専門委員会が結成され、そのメンバーとして任命された。同法が施行されると、将来の政策を模索するために通産省は、部品工業会に対して「日本自動車部品工業の実態」を求めてこられた。この重要な責任を担う専門委員に任命されたのは、部品業界のアメリカ視察団報告書を執筆したことが評価されたからであった。執筆した部厚い実態調査報告書は、制定が決まっていた機械工業振興臨時措置法（機振法）の実際の運用を左右することとなった。本来、機振法は日本の機械工業全体の近代化と合理化を進めて国内の平



1960年、米国ベンディックス社とブレーキに関し技術提携を結び、
その後1965年にはベンディックス社の方々を当時の岩槻製造所（現曙ブレーキ岩槻製造（株））にお迎えして

和産業基盤を整え、国民経済の国際競争力を強化することに目的があった。その意味で自動車部品業界による「自動車部品工業の実態」と題する部厚い報告書は、自動車産業を中心にして機振法を運用する通産省をサポートする基礎データとしても、役立つことができたのである。また、この機振法は自動車部品工業振興策として歴史に残る名法であった。同法は、部品工業技術発展と生産の両面の飛躍的発展に貢献し、ひいては自動車産業を世界の冠たる基幹産業に導いた功績がある。この自動車部品工業に関する実態研究と業界の育成への貢献が評価され、のちに社団法人全国学士会から「アカデミア賞」が授与されたのである。

1960年、曙ブレーキ工業株式会社へ社名変更後、米国ベンディックス社とブレーキに関し、技術提携を締結。先端技術を集め、ベンディックス社現地工場に劣らない施設水準を誇る工場を羽生製造所（現曙ブレーキ羽生製造（株））に建設し、日本ブレーキ業界での確固たる地位を確立する。その後の多方面にわたった時代を先取りする最先端技術の導入は、製品の品質を飛躍的に向上させ、世界のakebonoをめざす新しいビジネスチャンスの開拓につながったのである。

社長奮戦

1964年に代表取締役社長に就任し、「以誠接人、以和計事、以魂貫志」を社是として策定。その年に社員のコミュニケーションを図るツールとして、その社是の中心となす3字をとって「誠和魂」を社内報の誌名とし、6月1日に創刊。それを記念して6月1日を曙ブレーキ工業（株）の創立記念日としたのである。

1980年代に入り、経済の沈滞、原油価格の高騰、対米自動車輸出問題など、自動車業界全体がさまざまな意味で本質的変化を迫られる時代になった。そこで企業としての活動展開そのものを、経済のグローバル化に適したものへと根本的に転換する必要があった。77年から88年にかけて、日米間の自動車部品に関するMOSS=市場重視型個別協議を担当した経験や、84年に就任した日本自動車部品工業会の会長としての職務経験の中でこの確信をより一層強くした。

クリントン前アメリカ大統領（当時アーカンソー州知事）を
社に迎えて：1987年9月

第33回東京モーターショーにて
トヨタ自動車株式会社名誉会長　豊田章一郎氏と歓談：1999年

第28回東京モーターショーに皇太子殿下をお招きして：1989年

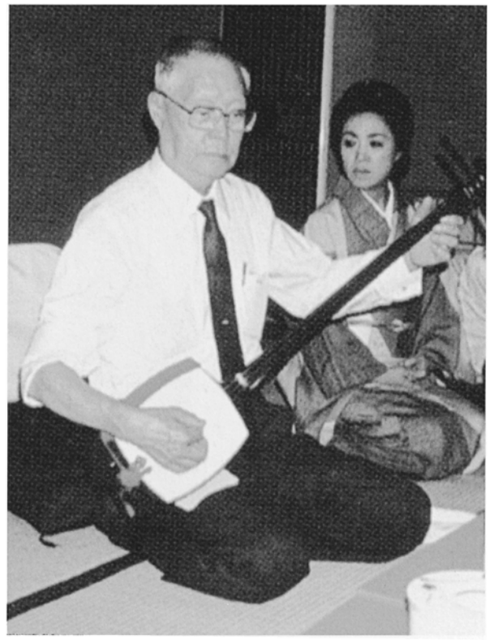
経営論

経営者は、経営というものが人によって支えられていることを忘れてはならないし、働いている人への目配りを忘れてはならない。楽に仕事をして、効率を上げながら品質を良くすることを考えるのは、ラインの合理化とあわせて、そこで働いている人のことを考えることにつながる。そして社員の方々には、両親に感謝し、やりすぎた失敗を責めず、失敗を他人のせいにしないで不断の勉強に心がけてほしい、働き甲斐や生き甲斐を大切にしながら「自分らしさ」を企業活動のなかで実現してほしい。と呼びかけてきたのである。

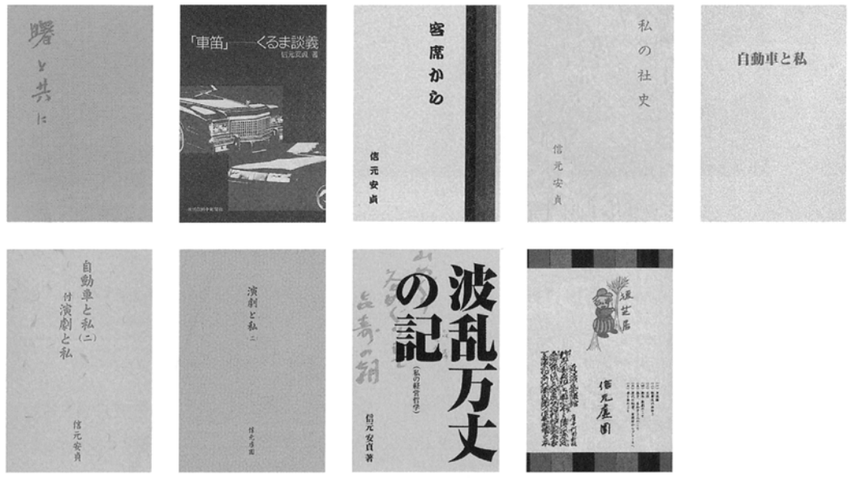
趣味

演劇、とくに日本の伝統芸能にも造詣が深い。「信元虚園」の雅号で数多くの舞踊劇の創作・演出も手がけ、趣味の域を超えた作品を残している。1983年には「上方舞を守る會」を設立、以来20年にわたり代表幹事を務めてきた。この功績に対し、1999年6月文化庁より「文化庁長官賞」が授与される。また俳句をこよなく愛し、還暦、古希、喜寿、傘寿と節目ごとにそれを残している。ちなみに誕生日は、8月19日（ハイク）である。

（テレビキャスター、カメラマン　三本和彦）



歌舞伎、文楽にはじまり、
長唄・常盤津・清元など古典文学に造詣が深く、
自ら舞踊劇を創作し、三味線の名取でもある



1979年～発行された主な著書。
中でも2001年発刊の「波乱万丈の記」（私の経営哲学）は、「この会社にはこんなことがあったのだ」ということを
全社員に知っておいて欲しいとの考えから書かれたものである